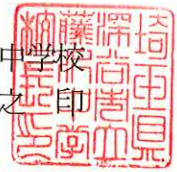


令和5年度 学校評価報告書

学校名 深谷市立藤沢中学校
校長名 清水正之



1 学校評価のねらい（学校としての受け止め）

- (1) 学校教育目標の実現を目指し、意図的・計画的に展開してきた教育活動の成果を検証し、課題を明らかにする。
- (2) 明らかにされた課題を次年度の教育課程編成に生かし、重点目標として取り組むことにより、学校教育活動の一層の発展・充実を図る。

2 評価の方法（自己評価・学校関係者評価・第三者評価の別、回数、方法等）

(1) 自己評価（教職員学校改善評価）

- ①実施回数 2回（1・2学期終了時）
- ②評価方法 17項目で4段階選択及び改善点や具体的な方策、満足度を記述。

(2) 学校関係者評価（保護者による学校評価）

- ①実施回数 2回（1・2学期終了時）
- ②評価方法 4段階選択及び意見を記述。（評価項目は13項目を設定）
各項目の目安となる具体的な教育活動を例示。

(3) 第三者評価（学校運営協議会委員評価）

- ①実施回数 1回（最終の学校運営協議会時）
- ②評価方法 4段階選択及び意見を記述。（評価項目は6項目を設定）
藤沢小学校との共催のため、小中共通の評価項目を設定。

(4) 学力・学習状況調査に伴う生徒を対象とした学習及び生活習慣等アンケート

- ①全国学力・学習状況調査時（4月 3年生対象）
- ②埼玉県学力・学習状況調査時（4月 全校生徒対象）
- ③学校独自の「規律ある態度」の調査（10月 全生徒対象）

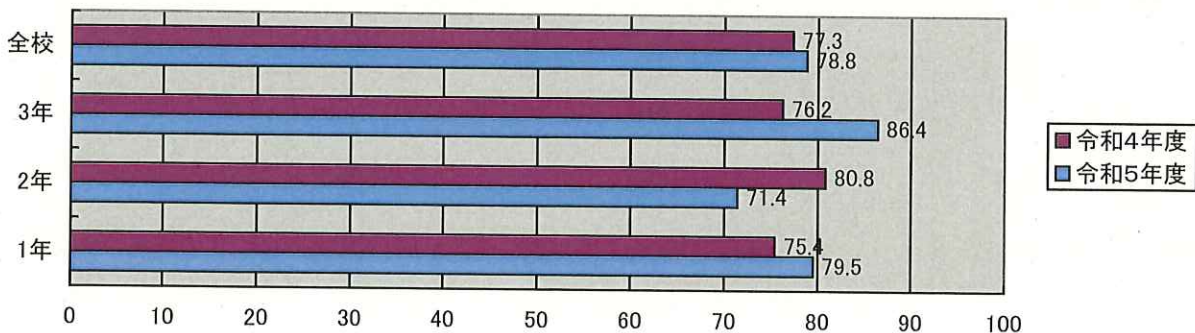
*上記ア～ウ以外に学校独自の「学校生活アンケート」（全生徒対象）を実施
年4回（4・7・9・12月）

3 評価の結果

(1) 主な指標の変化

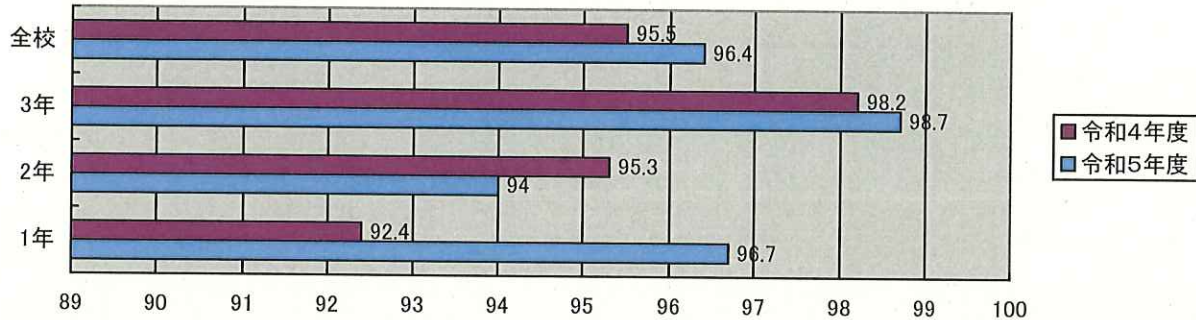
①生徒アンケートから

ア「家庭学習に取り組んでいる」という生徒の割合



中学校生活に慣れることで自身の生活リズムが確立し、2学年次では学校生活の中心となり様々な場面で活躍すること多くなることから、やや家庭学習への取組は減少するが、3年生になり進路を意識するようになり、再び家庭学習への取組が増加している。

イ「話し合い活動を通じ、考えを深め、広げることができる」という生徒の割合



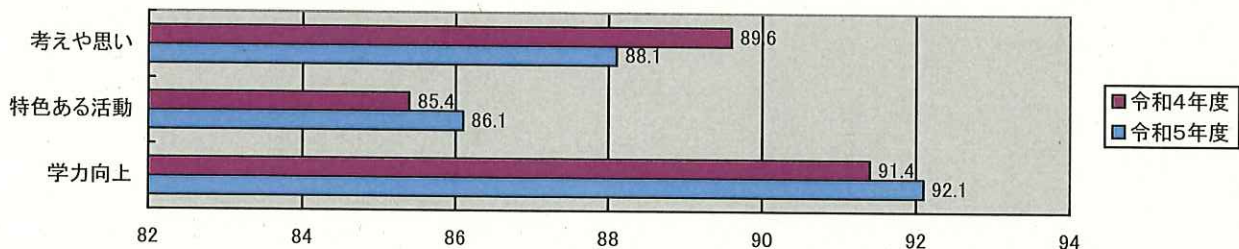
授業や学校行事などのあらゆる機会を通じて話し合い活動を積極的に取り入れることで、自分自身、お互いに考えを深め合うことができるようになってきていると思われる。学校全体として、話し合い活動に積極的に取り組むようになってきており、学習面や学校行事の場面などで、好ましい成果を表している。

②保護者アンケートから

ア「考えや思いを語り合うことのできる生徒を育てている」という割合

イ「特色ある活動を推進している」という保護者の割合

ウ「学力向上に努めている」という保護者の割合



(2) 学校教育目標の具現化に向けた指標

①「自ら学ぶ生徒」の育成

学力向上について、以下のような3つの柱で取り組んだ。

ア 授業における学習指導の工夫

学習の見通しや手順を明確にし、学習への意識を高める工夫を図った。また、課題に対するフィードバックなど学習評価の工夫を継続的に行った。

イ 当たり前の授業を確実に実施

50分間の授業を確実に実施し、職員の休暇や出張の際などには自習を行わず、原則、教科の交換を行って授業を確実に実施した。

ウ 3種類の学習会

「学期毎に希望者を募って行う学習会」、「定期テスト前に行う学習会」、「長期休業中に希望者を募って行う学習会」である。「わかる授業」を支える土台作りとして実施している。これらの学習会で、定着度の違いを考慮した学習形態の工夫をすることにより、

学力の二極化の解消を目指した。

②「心豊かな生徒」の育成

特色ある活動として、学校内外で紹介されるボランティア活動や地域の福祉施設との連携を積極的に行った。

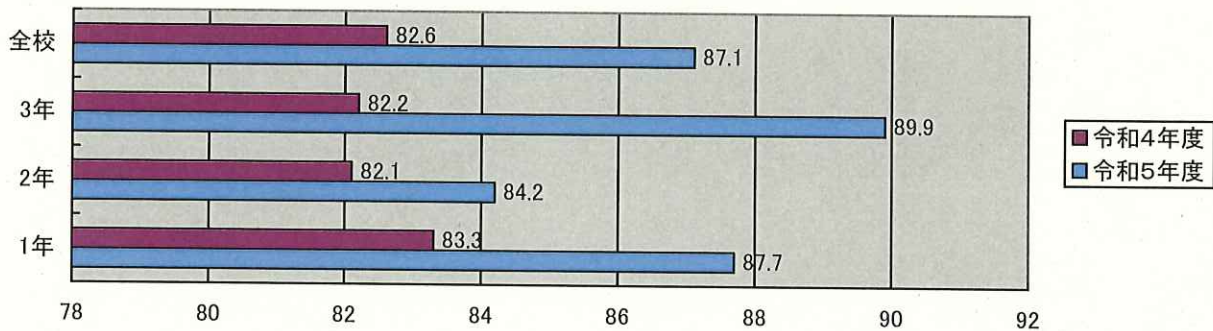
③「たくましい生徒」の育成

令和元年度から継続的な取組として、基礎体力づくりのため体育の始業時に音楽に乗せた補強運動を通年取り組んだ。リズムカルな動きの中に筋力強化や敏捷性などの要素を総合的に取り入れ基礎体力の向上を図ったことで、体力テストの結果も年度ごとに向上している。また、体育祭での「藤中ソーラン」に向けた取組では、上級生が下級生に伝授し、より完成度の高いものを目指した。

(3) 学校研究課題の具現化に向けた指標

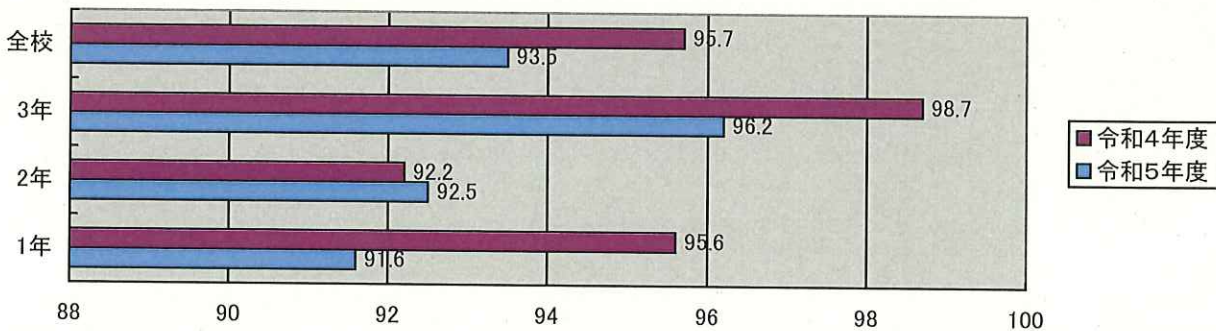
今年度は、学校研究課題を「生徒への効果的な教育活動を継続的に行える働き方改革の研究 ―授業でのICT利活用の推進と業務効率化を目指して―」と設定し、取組を行った。公的テストの結果以外に以下の指標の向上を目指した。

○「自分には良いところがある」という生徒の割合



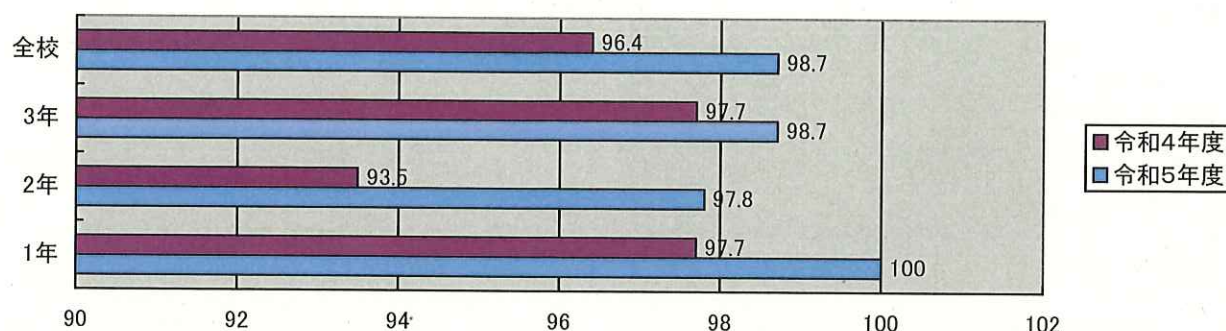
授業をはじめ、学校行事などのあらゆる場面で生徒を確実に見届け、次の指導に生かしていくというよい循環が見受けられ、長年本校生徒の課題である「自尊感情」の向上に研究の取組を結び付けることができた。

○「授業が分かる」という生徒の割合



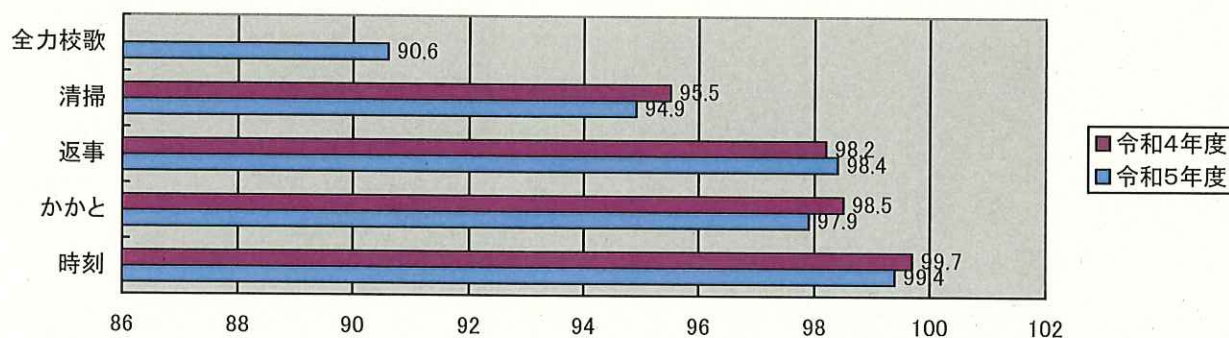
授業の内容の質を高めていることから全体としては昨年度の結果を上回ることはできなかったが、全学年、全校で「授業が分かる」という生徒が9割を超えることができた。

○「学校生活で一緒に生活するのは楽しい」という生徒の割合



全学年、全校で昨年度の結果を上回った。生徒が、本校で友人や教員と共に学校生活を送る楽しさを強く実感していることがうかがえる。これは、「分かる授業」の実践や生徒が充実感を味わうことができる学校行事の充実などが要因として考えられる。

○5つの基（日々の取組を通して）



全力校歌については新型コロナウイルス感染防止対策のため実施していなかったが、本年度から取組を再開した。昨年度と比較するとやや結果としては下回ったが、生徒会などを中心として礼儀などを重んじる学校生活を生徒は毎日送っている。

4 次年度に向けての展望 ※年度間の変化をみとり考察する

(1) 学力の差異に関わらず力を伸ばす

学習が得意な生徒とともにグループ学習で学び合い活動を実施することにより、学力の差異に関わらず、生徒個々の状況に応じた学力を伸ばすことができたと考える。

今後とも「活用する力」の向上を目指し、「対話や討論活動」「～し合う活動」をより多く取り入れた授業を展開するとともに、本時で身についた内容等について生徒自身が確認し、次の学習へとつなぐことができるよう努めていく。

(2) 記述式回答への苦手意識を減少させる

授業の中で生徒自身に説明させる場面をより多く作ると共に定期テストなどに記述式回答の問題を意図的に取り入れた。今後も継続して行うと同時に、経年変化を見ながら検証を行っていく。

(3) アフターコロナにおける新しい教育活動の推進

これまでの経験を活かし、アフターコロナにおける新しい教育活動を推進する。特に、週1時間授業を削減し、部活動を3ステージ制で実施するなどして、より生徒と触れ合う時間の確保に努めていく。